

# 可測関数

## 1 まとめ

$(X, \mathcal{F})$  を可測空間とし,  $E \in \mathcal{F}$  とする.  $f: E \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  ( $\overline{\mathbf{R}} = \mathbf{R} \cup \{\pm\infty\}$ ) と  $a \in \overline{\mathbf{R}}$  に対して,

$$E(f > a) = \{x \in E \mid f(x) > a\}$$

と略記することにする.  $E(f \leq a), E(f = a)$  等も同様とする.

定義 1

$f: E \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  が

$$\forall a \in \mathbf{R}, E(f > a) \in \mathcal{F}$$

のとき,  $f$  を  $(E$  上) $\mathcal{F}$ -可測関数, あるいは単に可測関数, 可測であるという.

この条件を, 任意の  $a \in \mathbf{R}$  に対して

$$E(f \geq a), E(f < a), E(f \leq a) \in \mathcal{F}$$

のいずれかとしても同値である.

定義 2

$(X, \mathcal{F}), (Y, \mathcal{G})$  を可測空間とし,  $f: X \rightarrow Y$  を写像とする.

$$\forall E \in \mathcal{G}, f^{-1}(E) \in \mathcal{F}$$

であるとき, つまり

$$f^{-1}(\mathcal{G}) \subset \mathcal{F}$$

となるとき,  $f$  を  $(\mathcal{F}, \mathcal{G})$ -可測写像, あるいは単に可測写像, 可測であるという.

定義 3

$E \in \mathfrak{M}_d$  とし,  $f: E \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  とする. ただし,  $\mathfrak{M}_d$  は  $d$  次元 Lebesgue 可測集合族とする.  $f$  が  $\mathfrak{M}_d$ -可測関数であるとき,  $f$  を Lebesgue-可測関数, あるいは Lebesgue-可測であるという.

定義 4

$E \in \mathcal{B}(\mathbf{R}^d)$  とし,  $f: E \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  とする. ただし,  $\mathcal{B}(\mathbf{R}^d)$  は  $d$  次元 Borel 集合族とする.  $f$  が  $\mathcal{B}(\mathbf{R}^d)$ -可測関数であるとき,  $f$  を Borel-可測関数, あるいは Borel-可測であるという.

$\mathcal{B}(\mathbf{R}^d) \subset \mathfrak{M}_d$  より明らかに,  $f$  が Borel-可測ならば Lebesgue-可測である.

## 2 問 1

$(X, \mathcal{F}), (Y, \mathcal{G}), (Z, \mathcal{H})$  をそれぞれ可測空間とし,  $f: X \rightarrow Y, g: Y \rightarrow Z$  をそれぞれ可測写像とする. このとき,  $g \circ f: X \rightarrow Z$  も可測写像になることを示せ.

### 3 問2

$f: X \rightarrow \mathbf{R}$  とする. 以下は同値であることを示せ.

- (1)  $f$  は可測関数である.
- (2)  $f$  を  $(X, \mathcal{F})$  から  $(\mathbf{R}, \mathcal{B}(\mathbf{R}))$  への写像とみなすとき,  $f$  は可測写像である.

### 4 問3

$f: \mathbf{R} \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  とする.  $f$  が  $\mathbf{R}$  上上半連続ならば Borel-可測であることを示せ. ただし,

$$f \text{ が } x_0 \in \mathbf{R} \text{ で上半連続} \iff \forall \varepsilon > 0, \exists \delta > 0, |x - x_0| < \delta \implies f(x) - f(x_0) < \varepsilon$$

$$f \text{ が } A(\subset \mathbf{R}) \text{ 上上半連続} \iff \text{各 } x \in A \text{ で } f \text{ が上半連続}$$

と定義する.

### 5 問4

$(X, d)$  を距離空間とし,  $f: X \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  とする.

- (1)  $f$  が  $X$  上下半連続なことと, 任意の  $a \in \overline{\mathbf{R}}$  に対して  $X(f < a)$  が開集合であることが同値であることを示せ. ただし,

$$f \text{ が } x_0 \in X \text{ で下半連続} \iff \lim_{x \rightarrow x_0} f(x) = \lim_{\delta \rightarrow +0} \inf\{f(x) \mid x \in X, d(x, x_0) \leq \delta\} \geq f(x_0)$$

$$f \text{ が } A(\subset X) \text{ 上下半連続} \iff \text{各 } x \in A \text{ で } f \text{ が下半連続}$$

と定義する.

- (2)  $f$  が  $X$  上下半連続ならば Borel-可測であることを示せ.

### 6 問5

$(X, \mathcal{F})$  を可測空間とし,  $E \in \mathcal{F}$  とおく.  $f: E \rightarrow \mathbf{R}, g: \mathbf{R} \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  とする.  $f$  が  $\mathcal{F}$ -可測,  $g$  が Borel-可測であるとき,  $g \circ f: E \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  が  $\mathcal{F}$ -可測であることを示せ.

### 7 問6

$(X, \mathcal{F})$  を可測空間とし,  $E \in \mathcal{F}$  とおく.  $f_n: E \rightarrow \overline{\mathbf{R}} (n = 1, 2, \dots)$  は  $\mathcal{F}$ -可測であるとする. このとき, 集合  $A = \{x \in E \mid \{f_n(x)\}_{n=1}^{\infty} \text{ が収束する.}\}$ , 集合  $B = \left\{x \in E \mid \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) = \pm\infty\right\}$  について,  $A, B \in \mathcal{F}$  を示せ.

### 8 問7

$(\mathbf{R}, \mathcal{F})$  を可測空間とする.  $\mathbf{R}$  上の任意の連続関数が  $\mathcal{F}$ -可測であるための必要十分条件は,  $\mathcal{B}(\mathbf{R}) \subset \mathcal{F}$  であることを示せ.

## 9 問 8

$(X, \mathcal{F}, \mu)$  を完備測度空間とし,  $E \in \mathcal{F}$  とおく.  $f: E \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  は  $\mathcal{F}$ -可測とし,  $g: E \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  とする.  $E(f \neq g) \in \mathcal{F}$  かつ  $\mu(E(f \neq g)) = 0$  ならば,  $g$  も  $\mathcal{F}$ -可測であることを示せ.

## 10 問 9

$E \in \mathfrak{M}_d$  とし,  $f: E \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  とする. 以下は同値であることを示せ.

(1)  $f$  は Lebesgue-可測である.

(2)  $E' \in \mathcal{B}(\mathbf{R}^d)$  と  $g: E' \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  なる Borel-可測関数が存在して,

$$E \subset E', E(f \neq g) \in \mathfrak{M}_d, m_d(E(f \neq g)) = 0$$

となる. ここに,  $m_d$  は  $d$  次元 Lebesgue 測度とする.

## 11 問 10

$f: \mathbf{R} \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  が単調増加であるとき, Borel-可測であることを示せ.

## 12 問 11

$f: \mathbf{R} \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  の不連続点が高々可算個であるとき, Borel-可測であることを示せ.

## 13 問 12

$f: \mathbf{R}^d \rightarrow \mathbf{R}$  が Borel-可測であるとし, 可測空間  $(X, \mathcal{F})$  に対して  $g_i: X \rightarrow \mathbf{R}$  ( $i = 1, 2, \dots, d$ ) を  $\mathcal{F}$ -可測とする. このとき,  $F(x) = f(g_1(x), g_2(x), \dots, g_d(x))$  は  $\mathcal{F}$ -可測であることを示せ.

## 14 問 13

$(X, \mathcal{F})$  を可測空間とし,  $f, g: X \rightarrow \mathbf{R}$  を  $\mathcal{F}$ -可測とする. 問 12 を用いて

$$af + bg (a, b \in \mathbf{R}), fg, |f|^\alpha (\alpha > 0), f^+, f^-, f \wedge g, f \vee g$$

が  $\mathcal{F}$ -可測であることを示せ.

## 15 問 14

$(X, \mathcal{F})$  を可測空間とし,  $f: X \rightarrow \overline{\mathbf{R}}$  とする.  $f$  が  $\mathcal{F}$ -可測であるための必要十分条件は  $|f|$  と  $|f + 1|$  とが  $\mathcal{F}$ -可測であることを示せ.

## 16 問 15

$f: \mathbf{R} \rightarrow \mathbf{R}$  が各点で微分可能とする．このとき  $f'$  は Borel-可測であることを示せ．